3・11 岡山から

東日本大震災3ヵ月

○1○

心満たす菓子の力実感

廣榮堂 武田 浩一社長(48) きびだんご配布

3月11日に発生した東日本大震災から3カ月。国内経済は大きな打撃を受け、岡山県内でも事業所が被災した企業は多い。一方で、経済界をはじめ、地域の各界が復興に向け、被災地支援を続けている。未曽有の災害で、地場企業・団体のトップらは何を思い、どう行動してきたのか―。それぞれの「3・11」を聞いた。

◇

東日本大震災が発生した直後、居ても立ってもいられなくなり、「現地に行こう」と社内で声を上げた。当社のきびだんごのキビは全て被災地の岩手県花巻市産で、年間5トンを仕入れている。現地には同業の仲間も多い。1995年の阪神大震災の際、父(修一会長)の呼び掛けで、炊き出しをした。温かい汁粉が喜ばれ、今回も駆け付けようと思った。

被災地に訪問した際のことを振り返る武田社長(中央)と本郷さん(左)、高祖さん

交通網が寸断され、すぐに現地入りはできなかったが、代わりに国際医療ボランティアAMDAなどを通じ、きびだんご約1400箱を被災地に贈った。「この一粒に精いっぱいの気持ちを込めました」「岡山の地から応援しています」。全ての箱に従業員の手書きメッセージを添えた。

「きびだんごをいただき、沈んでいた気持ちが元気になった」と、岩手県大槌町の男性からお礼の電話をいただいた。混乱が続いている中、衛星電話を使って連絡してくれた。その言葉に突き動かされ、4月10日、社員2人と現地に入った。

大槌町のほか花巻市などの避難所を回り、きびだんご900箱と絵本を配った。皆さんとても喜んでくれた。子どもたちの笑顔は輝いていた。菓子は、単に腹を満たす糧ではなく、心を満たすものであり、われわれの仕事の使命を実感した。

岩手県大船渡市の水産加工会社では、骨組みだけが残った建物で、従業員たちが懸命に片付けをしていた。職場は人が集まり、地域を支える場。農漁業も含め、形あるものは流されたが、技術や仕事の文化は失われない。職場がよみがえれば、地域もよみがえるはずだ。

大船渡市の小学校で子どもたちにきびだんごを贈る武田社長(左)=4月11日

本郷司さん(47)、高祖幸宏さん(24)

直接届け多くの人笑顔に

〈武田社長とともに4月10日から12日まで、被災地できびだんごを配った〉

本郷さん 皆さん疲れ切った表情をしていた。「岡山から届けに来ました」ときびだんごを渡すと、涙を浮かべながら「頑張ります」と応えてくれた。小さな菓子だが、食べて幸せな気持ちを取り戻してほしかった。直接届けることで、思いが伝わり、多くの人たちに笑顔になってもらえた。

高祖さん 被災地は見たこともない光景だった。たくさんの人々の営みがそこにあったと思うと、胸が痛んだ。ボランティアの方や自衛隊員らが懸命に作業している姿が印象に残っている。支援の輪は広がっており、必ず復興できる。後世になっても震災の記憶を風化させないよう、現地で見て感じたことを伝えていきたい。

きびだんごを渡す際、「いつか岡山に旅行に来てください」と一人一人に呼び掛けた。被災地の皆さんが旅行を楽しめる時が来ると信じている。それが復興だ。われわれは仕事に励み、商品に磨きをかけ、その日を待っている。